

### 山内瑛姫の晩年 (3)

#### —結婚の周辺—

第75回 (昭和43年卒) 青柳明子

前回の天保6年から時を遡ること76年前の天保12年 (1841) 冬、庄内藩江戸中屋敷は深更に至って慌ただしい動きに包まれていた。その折の様子を当時、お部屋近習であった上野源太夫は心覚えにこう記している。

「世孫忠恕君三歳にならせらるゝ時の冬、御風邪より御疳癖にならせられ余ほどの御容体なりければ、(中略)ある日の八時ころにもあらん、御引付にて気を失ひたまひ、殿中大さわぎして、やうやう御ひらきにならせらる。(中略)この夜半子(ね)過るころ、世子忠発公急ぎ来たりたまひ、長坊また引付たり、源太夫早く参れとの御声に驚き、直に起ちて御廊下を長しと走り御部屋に参り伺ひけるに、きびしき御引付にて以ての外の御容体なり」(上野源太夫「夢の妄語」)

「長坊」とは酒井忠発(ただあき)の次男で幼名を長次郎、後の忠恕(ただひろ)のことで、十代目藩主の酒井忠器(ただかた)の孫にあたるので「世孫」である。長次郎はこの時数え「三歳」であるが、生年は天保10年12月20日(「酒井家世紀」)なので、生まれた当日に1歳、10日後の天保11年元日を迎え数え2歳となったから、「三歳の冬」は天保12年末の冬であり、満年齢だとまだ2歳になるやならずという頃だったと思われる。天保12年といえば、庄内藩は三方領地替えの危機を何とか切り抜けたが、報復として9月に10代目藩主酒井忠器は溜問詰から帝鑑問詰に格下げにされていた。まだ「世子」であった忠発とその家族の住まいは、柳原邸だったと推察される。

さて、源太夫が部屋に入ってみると、既に医師が三名いて、熊胆(くまのい)などいろいろな薬を飲ませようとしていたが、効果はないようだった。さらにもう三名の医師が召喚され、彼らもまた何とか手当てしようとしたが、「今は漫驚風といふにならせたまへば、とても叶わせられぬ御事なりとて、他に上げる神薬もなし」という状況に至ってしまったのである。「漫驚風」とは何か。広辞苑でひくと「漫」は「すずろ一程度が著しい」であり、「驚風」は「漢方で、小児の脳髄膜炎および脳膜炎様の症状、脳水腫や癲癇も指したらしい。」とある。風邪の発熱から引付を起こすことは幼児にはままあることであるが、それが重症化したものだったろうか。幼子の部屋は六名の医師とそれを取り囲む人々で満ち溢れていたが、全員が途方にくれた。前年の天保11年3月に長子の新太郎が2歳で夭折しているので、また同じ事態にならぬかと内心に恐れた者もいたことだろう。

その時、源太夫はふと思いつくことがあって、御守役の都築某にこう言った。「米沢の渡辺吉郎、この都に出て大いに流行す。先年庄内にも来たり、奇方をもって多く難病の人を救ひしかば」この者に診てもらったらどうか、と。

都築は「げにも」とうなづき、さっそく忠発公に伺いをたて、すぐに吉郎を呼びに行かせた。吉郎は呉服橋近くの北槇町に居を構えていたので、柳原とはそう遠くはなかった。渡辺吉郎は現在の山形県飯豊町黒沢の豪農の次男で、十代半ばで米沢の蘭医堀内素堂に学び、後に和歌山の華岡青洲のもとで5年間修行した。天保8年に庄内に招かれて暫く滞在して病人を診た。その功績で庄内藩からも五人扶持をたまわり、天保10年には江戸で開業し、評判も高く弟子も多く抱えていたのである(高橋拓「華岡青洲の弟子・渡邊吉郎の足跡」『米沢史学』)。

渡辺吉郎は程なくしてやってきた。吉郎は病児をよくよく診察すると「恐れ入りたる御容態なり」と重態であることを告げてから、こう言った。御医師衆が残るところなく御薬を上げられても御しるしがないのであれば、私にしてもお勧めできる薬はありません。ただ「導引」という術

を施してみても、御目を動かし御口を開かれるようなら、見込みはあります、と。それを聞いた医師団は、「導引」は大人にかけても強く堪えがたいことがあると聞く。このような小児に、しかも重態であることを考えれば大丈夫であろうか、とさざめき合い、誰一人肯定する者はなかった。

源太夫は都築に「この御危急にいつまで猶予し居らんこと、いわれなき事にあらずや」と言い、ともかく事の次第を忠発公に申し上げたところ、「何事にて能といふこといたすべし」との御言葉を得て「導引」を施すことになった。

「導引」とはいかなるものか。広辞苑では「道家で行う一種の治療、養生法。体肢を屈伸、動作させたり、静座、摩擦、呼吸などを行ったりする」とある。渡辺吉郎は同道してきた「むくつけき田舎男」にいくつかの指示を出した。その男が施術者であった。すると「そろそろと導引して、御背の中ほどにいたりければ、御目をびくびくと動かし、御口も開きたまひてあくび一つしたまひければ」と病児の様子が変わってきた。吉郎は喜んで、なおも施術を続けさせるうちに、「御目をひらきたまふた」のであった。源太夫はこれを見て、また廊下を走って忠発公の元に行き、事の次第を報告した。「公もすぐさま御部屋に入らせられて、御悦び限りなし」と、皆で安堵の息をついたのであった。

こうして、長次郎（忠恕）は上野源太夫の機転と、医師渡辺吉郎によって生命の危機を救われた。長々と忠恕の幼少の頃の病気について記したのは、これが後の彼の健康問題を考えるときに、ある重要な示唆を与えてくれるからである。ちなみに渡辺吉郎は嘉永3年（1850）、庄内で初めて安全な牛痘種痘を実施した医師でもある。

天保13年（1842）4月、酒井忠器は藩主の座を長男の忠発に譲った。忠発は31歳で11代藩主となった。その治世は印旛沼疎水工事、大山騒動、異国船の出没による海岸防備など内憂外患の難事が多かった。そのような中、忠発は嘉永2年（1849）、長次郎忠恕の婚約に関して次のような行動をとったという。

「嘉永2年忠発公、柳営に於て土州公と直接に結婚の約を仮整せられしと云ふ」（『酒井家世紀巻32 忠発公』）

この記事によれば、忠発は江戸城内で土州公（山内家）と直接に縁談を話し合ったということである。この時の土佐藩主は山内豊信（とよしげ、後に容堂と号した）であり、藩主になってまだ日も浅かった。土佐藩では12代藩主豊資が天保14年（1843）3月に隠居、世子豊熙（とよてる）が13代藩主となった。ところが、彼は嘉永元年（1848）7月、急な病で34歳を一期として卒した。まだ男子が生まれていなかったため、9月6日に実弟の豊惇（とよあつ）を養嗣子として藩主とした。その豊惇もまた、12日後の9月18日に急な病で世を去ったのである。この人にもまた嗣子は無かったので、山内家は家督断絶の危機を迎えたが、急遽、連枝の山内南家の豊信を養嗣子に迎えて相続させることに成功した。山内豊信が土佐を発って江戸に入ったのは嘉永元年11月末のことであった。ただし、元藩主で隠居の豊資はまだ健在で、保守的な重臣たちが脇を固めていたので、豊信には自主的な施策をする余地は殆ど無かったという（平尾道雄『山内容堂』吉川弘文館）。

江戸城内で酒井忠発が、藩主になったばかりの山内豊信に申し込んだという縁談とは、嗣子忠恕に山内家の瑛姫を迎えたいということであった。瑛姫は13代藩主の豊熙の娘であり、豊信にとっては養叔母に当たる。とはいえ彼女は天保12年3月28日に江戸で生まれたので、この時点ではまだ9歳の少女である。

この「直談判」の話は伝聞に近いとはいえ、実際の縁談は滑らかに運んだようである。

高橋種芳「編年私記」（『庄内史料集16-1 明治維新史料幕末期』）の嘉永2年条には「若殿様へ御縁組被仰入有之。若殿様（忠恕）へ松平兵庫助様（山内豊熙）之於瑛様四月二十一日表向御縁組

被仰入有之。此方様より杉山弓之助殿、御使者ニテ被仰入。御双方御取交御首尾能相済。」とある。

ここで、忠恕の縁談成立に、父親の忠発が積極的に関わったらしいこと、時が嘉永2年だということに注目したい。アメリカのペリーが浦賀に来て開国を迫ったのが、4年後の嘉永6年（1853）であることから、この時点ではまだ公武合体とか尊王攘夷などの言葉が取りざたされる状況にはなかったと思われる。つまり、従来言われているような、「忠恕と瑛姫の婚約は公武合体派が推し進めた」というような事実はあったのかどうか、はなはだ疑問である。この年次と経緯だけを見ても、何らかの政治的色彩はつきようがないと思われるのである。この点は重要だと思われるので、適宜考察していきたい。

忠恕は嘉永6年12月、従五位下に叙せられ摂津守と称せられることになった。「酒井家世紀」によれば、学問好きで『資治通鑑』などを読んで、中国周王朝時代の人物のかれこれを近習たちと評しては楽しみ、詩文を作ることも好んだ。元服もし、官位も授けられて、いよいよ結婚も視野に入り始める。

ところが、このころから列島には地震が頻発した。Wikipedia「安政大地震」によれば、安政元年（嘉永7年）、11月4日、遠州灘沖を震源とするマグニチュード8.4の地震があり、死者2千人。そして翌日の11月5日、土佐沖を震源とする南海地震が起きた。山内家の領地の土佐はその日、小春日和の快晴だった。16時半頃、ゆるゆると揺れ始めたが、次第に強くなりやがて激震となった。ちょうど、夕食支度の時間帯だったので、火災が多く発生した。17時頃、津波の第一波が土佐湾沿いに襲来し、その後繰り返し寄せて、多くの人家が流失した。マグニチュード8.4で、全体の死者は数千人であった。この二つの大地震を凶事として、11月27日、元号が安政と替えられた。

そして、ほぼ一年後の安政2年10月2日、江戸の大地震が起きる。この時のマグニチュードは6,9だったものの、人口集中の都会江戸での死者は4千人を数えたという。

この地震で庄内藩上屋敷も大被害を受けた。5月21日に庄内を発って江戸藩邸に居た藩主忠発は、柳原の中屋敷に一時仮住まいをした（「編年私記・安政2年」）。その後の数年は江戸中、復興に大わらわだったことだろう。また山内家は国元の大災害で、婚礼どころではなかったのではないか。

安政4年（1857）、19歳の忠恕は父忠発に代わって7月16日、庄内にお国入りをした。滞在中、藩校致道館の諸生に作文の題を出すなどして交わり、また「列卒を率いて山野を駆けて猟した」りして、「酒井家世紀」の述べるところでは、颯爽たる若殿ぶりであった。「編年私記」によれば、安政5年（1858）の4月12日「若様、与内坂ニおいて御調練御覧」になり、「御家中へ御肴一折ツゝ被下置候」とある。これは長沼流の足並調練のことである。5月10日、忠恕は江戸へ向けて出立した。

同年6月16日、江戸に戻っていた忠恕のもとに、土佐山内家の瑛姫が輿入れしてきた。婚約期間は約9年に及び、途中、安政の大地震などがあったものの、なんとか無事に華燭の典を挙げ、ここに数え年20歳と18歳の新夫婦が誕生した。世子忠恕の婚礼の儀を済ませた藩主忠発は7月17日に江戸を発ち、同29日には鶴岡の城に入っている。但しこの間、7月6日には将軍家定が死去している。4月に井伊直弼が大老に就任し、6月に日米通商条約が結ばれ、7月にはいわゆる「安政の大獄」が始まるなど騒然とした中で、将軍家定の死は一ヵ月ほど秘され、8月8日に公にされた。もし婚礼がもう少し後だったら、延期になりかねなかった。

ところで『鶴岡市史』やそれを元にしたと思われる書籍の多くは、結婚日時を「嘉永5年（1852）」としているが「酒井家世紀」によれば「安政5年（1858）」である。また「金井国之助日記六 安政五年六月条」にも「十一日若御前様御祝納」とある。そして、大正7年（1918）の酒井忠悌日記に「御入興後61年目の御祝い」が記されているので「安政5年」が正しいと思われる。また土佐山内家との婚約は「改革派の積極的な推進で決定された」とも『鶴岡市史』にはあるが、その論拠となる根本史料はあるのだろうか。先にも述べたように婚約の成立した嘉永2年はペリー来航の4年前であり、まだ政治色の希薄だった山内豊信に申し込んだのは忠恕の父忠発であるとするれば、「改革派」の容喙する余地はなかったのではないか。

新婚生活は長くは続かなかった。瑛姫が興入れしてから5か月後の11月5日、忠恕は柳原邸で重態に陥った。その悲報を国許で受け取った高橋種芳は「編年私記」安政5年条にこう記している。

「十一月十三日 若殿様（忠恕）御逝去、当八月頃より御癩ニ被為成追々不出来相成候由相聞候処（中略）当月四日より御病氣以之外差詰り、翌五日亥下刻、御重病ニ被為至候」

これによれば忠恕は8月頃から体調を崩していたらしい。「癩」という単語に注目しよう。「癩（瘡）」を広辞苑で引いてみると「①漢方で小児の神経症の一種 ②小児が胃腸を害して体が痩せ腹がふくれる病氣 ③皮膚または粘膜上の腫物」とある。現代医学からするとどのような病気に相当するのだろうか。

『鶴岡市史』では忠恕の死因を「麻疹」としているが、「酒井家世紀」では単に「病みて卒す」としか書かれていない。「麻疹」で亡くなったと明確に「酒井家世紀」に書かれているのは12代藩主で24歳の若さで逝去した酒井忠寛の方である。

幼少の折の「厳しき御引付」などから推測するのだが、この時代の身分の高い家の幼・青少年の早世の原因の一つとしてよく言われる、「乳母の白粉による鉛毒」などを検討しても良いのではないか。鉛中毒は胃腸障害、貧血、神経麻痺などの症状を呈する。また、当時の「江戸煩い」と呼ばれた脚気なども考えられる。

11月5日に重態に陥った忠恕が実際に亡くなったのは11月13日と「編年私記」にはある。また同書には藩主の思召しにより、命日を11月5日に決めたことが述べられている。何故そうしたのかは書かれていないが、ともあれ、忠恕は諡号を「賢明院」と名付けられた。冬の最中の事でもあり、庄内への道は深い雪があるので、江戸の清光寺に葬られた。その柩は大正9年に庄内への帰還を果たす。

忠恕の死の一月後、伊黒定十郎という御小姓が柳原邸の休息所で切腹した。遺体はひとまず病氣として長屋に移された。高橋種芳は「編年私記」に「又、風説には定十郎御看病申上候節、御祈祷之御菓子被召上、夫より御不出来故、同僚之内定十郎不行届を申唱候故」と記している。「御祈祷之御菓子」とは、筆者も幼いころ祖母が「有難い御護符だから」と食べさせてくれた、粉を固めた干菓子のようなものであろうか。その御護符菓子を食べたのちに忠恕の具合が悪くなったことを同僚に責められたのが自刃の原因というのであれば、気の毒な気もするが、あまり政治色のある話ではない。かれは書置（遺書）を残していたらしく、一年後、藩命によって遺族が藩に書置を提出した。定十郎を責めたとする同僚の名前が書いてあったようなので、藩としてはこれ以上の混乱を避けたかったのかもしれない。ただし、高橋種芳の記録した顛末は「風説には」と自ら述べているように、おそらく同時代の人が聞いた話をもとにしていたのだろう。確実な史料とは言えないが、「お護符菓子」にそれなりのリアリティーがあるので、紹介した。

従来、忠恕と瑛姫の婚約・結婚には「改革派」「公武合体派」の思惑が絡み、忠恕の死に「謀殺説」もある、とされている。『鶴岡市史』の一節を引用してみよう。

「安政五年十一月十五日（「酒井家世紀」では11月5日、「酒井忠悌日記」も同じ。「編年私記」は13日）世子忠恕は前途有為の身をもって死んだ。時に二十歳に過ぎなかった。病気はこの年全国的に流行した麻疹であったが、直接の死因については奇怪な流言が飛ばされ、改革派は近習某の不忠に憤慨し、近習井黒定十郎の如きは慨嘆おくあわず自刃して果てた。」

つまり、井黒定十郎の自刃などは「編年私記」とは真逆の捉え方をされている。「直接の死因については奇怪な流言が飛ばされ」という根拠となった論文は、阿部正巳の『庄内藩幕末勤皇秘史』であろう。それには「11月5日の夜、看病中の近習の者が、床中の忠恕を布団を以て覆ひ被せて窒息に至らしめたといふことである」とある。しかし、11月4日から容体が差し迫っていた藩の世子の枕もとには、常に複数の医師が詰めていたであろうことは、幼少時の重篤な引付の場合を見て明らかで、近習しか側に居なかったなどとは考えにくい。また前にも述べたように、忠恕は11月5日に重態となり、卒したのは13日であったとの事なので、ここでも謀殺説は成立し難いのである。

阿部正巳はまた根拠の一つとして、大山庄太夫の密書中の「賢明院様御大病中、不忠の取計相聞候由之事」（『明治維新史料幕末期』）を挙げているが、「不忠の取計」の具体的な内容は記されていない。

筆者はこうした「通説」には距離を置きたいと思う。史料を辿っていくと、この件に関して『鶴岡市史』は細かい点においても、首をかしげざるを得ないことがある。例えば、安政5年に全国的に流行したのは麻疹ではない。「八月頃より奇病流行。江戸にて大流行いたし都下の死人甚だし」（「編年私記」）とあり、庄内藩でも江戸在勤の御家中、御給人、中間までかなりの人数が死亡、国元でも死者が出た、とある。この「奇病」はコレラであった。ただし、忠恕の場合は病気の経過が3、4か月に及んでいることから、コレラではないと思われる。

ついでに言えば、『鶴岡市史』にある「慶応元年十一月八日夜、将軍より忠恕夫人が頂戴し百間堀の中土手で飼っていた鶴が何者かに斬り殺された。改革派の陰謀だと噂されたが、真偽の程は分からない」という一節の「忠恕夫人」は、「編年私記」によれば「大御前様（忠発夫人）」である。時の将軍から鶴を賜ったのは、田安家から嫁いできた藩主夫人の方が筋も通る。また、もしこれが「改革派」の仕業なら、彼らが心寄せていた忠恕夫人の瑛昌院への嫌がらせは、変な話なのである。

結論として、忠恕と瑛姫の結婚、忠恕の死を、現在までの通説の文脈から切り離すべきだと思われる。ただし、それはいわゆる「丁卯の大獄」とか「大山庄太夫一件」と呼ばれた慶応2年の庄内藩内部の悲惨な粛清の意味を軽くしたり、否定することではない。

宮地正人博士（東京大学名誉教授）が「幕末維新期の庄内藩と新徴組」（『通史の中の庄内』平成29年 記念講演集）に於いて「丁卯の大獄を如何に位置づけるか？」の中で、「庄内幕末史で『丁卯の大獄』と言われているものは、庄内独特のものではないと私は思っています。幕末史の全国レベルの動きの庄内版なのです。」と述べておられる。庄内幕末史を通史の中で詳細に捉えなおすことで、また新たな視点が開けるのかもしれない。

瑛姫は忠恕没後、落飾して瑛昌院となり「或いは庄内に住し、あるいは東都に居り歳月を送りけるが、明治二十一年五月、鶴岡檜物町の別邸に住居を定む」（「酒井家世紀」）のである。その辺を簡単にスケッチしていきたい。

文久2年(1862)7月、井伊直弼に遠ざけられていた松平春嶽が政治総裁職として江戸城に帰ってきた。春嶽は、隔年であった参勤交代を3年に一回とし、さらに人質として江戸藩邸に住まいしていた妻子を国元に返しても良いとした。それを受けて、庄内藩でも、翌文久3年(1863)3月13日、大御前様(忠発夫人)、瑛昌院が江戸を発ち、3月27日に鶴岡に着いた。江戸に生まれ育った瑛昌院にとって、初めての大陸旅行であった。山内瑛姫として山内家の領地、南国土佐の地を踏んだことはなく、短い結婚生活の縁で遠い北国に赴くことになったのである。「編年私記」によれば「近在酒田等より拝見之もの夥敷事也、御道中も同様、拝見罷出候もの広大なるよし」ということで、一行の御行列は沿道の人々の歓迎を受けたようである。瑛昌院はしばらくの間、藩士水野藤弥の屋敷に入り、その間、藤弥一家は万年橋下屋敷へ移った。瑛昌院の住まいになる御花畑御殿は、江戸の下谷御殿を取り壊して、西廻りの船で運んで建てることになっていた。ちなみにこの年の4月13日、江戸では清川八郎が暗殺されている。

瑛昌院が御花畑御殿に引き移ったのは、元治元年(1864)8月25日であった。その後、明治4年、廃藩置県により藩主の家族が東京に移住し、瑛昌院も11月1日に東京へ出発する(「瑛昌院年譜」鶴岡市郷土資料館作成)。以降、東京に住み、或いは国元を訪れて過ごす日々が続き、明治21年48歳の時に、鶴岡市檜物町に移住し、生涯をその邸で過ごすことになるのである。

大正7年(1918)6月8日、酒井忠悌は日記に「母上様御嫁つき後、六十一年目の件に付」菅実と御内祝いをどうするかについて、話し合ったことが記されている。夕方帰宅後、瑛昌院に「御話申し上げ、矢張十一日に行くこととなり」という記述はたぶん、次のような事情であったろうか。

「酒井家世紀」の「忠恕公」の項には、「(安政)五年六月十六日、瑛姫君御入輿」と書かれているが、引き続き「夫人瑛姫君」の項では、「安政五年六月十一日夫人来帰(ママ)す」とある。つまり、日にちに5日間のズレがある。

「金井国之助日記 安政五年条」に「六月十一日、若御前様御祝納」とあるので、11日が結納、婚礼が16日ではないだろうか。おそらく内祝いの日を11日にするか16日かということで、忠悌は瑛昌院に相談し、意向を受けて「矢張一やはり」6月11日にすることにしたのだろう。瑛昌院にとっては6月11日の結納の日が記念すべき日だったようである。彼女自身の思い出の領域にかかわるエピソードがあるのかもしれない。

当日の日記の残り全文を引用しよう。

「晴。御祝宴。午前八時過ぎ、菅実来り。皆々様よりの被進の鯛ご披露あり。午後三時過、再び来り。五時前より叔父様御始皆々様御出あり。六時頃より配膳、なかなかの盛会なり。八時前散会」

—この項終り—